

豊田市
郷土資料館
だより

No.35

Toyota City Museum
Of
Local History



長篠合戦図屏風
(部分)
(浦野正二氏所蔵)
渡辺半蔵守綱の馬印
(手桶)が強調されて
描かれている。

目次

- ・市制50周年記念特別展『豊田市の城下町展』——2
- ・郷土史調査レポート——4
- ・心のふるさと無形民俗文化財 祭り・行事・技——5
- ・収蔵資料の紹介・岩長遺跡展示室オープン——6
- ・発掘調査速報——7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース——8

豊田市の城下町展 中世～江戸期の豊田

平成13年2月16日(金)～3月18日(日)

本年度の特別展は、市制50周年記念行事のテーマ「やさしい風土」に即し豊田のまちづくりの歴史を振り返る展示を行うことになりました。

豊田市域に人が住んでいることがわかるのは約1万6千年前です。以来多くの人々がこの地に住み、ムラやマチを作り生活を続けてきました。こうした人々の生活のあとは多くの遺跡としてのこっていますが、今回は中世期のこの地方の領主と江戸時代に城下町として発展した拳母・寺部・伊保の3つの町に焦点をあてて豊田市の過去を紹介します。

中世期の領主と豊田

鎌倉時代から室町時代にかけて豊田市域には、高橋荘、足助荘、重原荘、碧海荘といった荘園があった事がわかっています。このうち高橋荘領主といえる一族には高橋氏、長田氏などが知られていますが鎌倉幕府から任命された地頭職に小野氏、承久の乱後には中条氏がいました。



国・重文「太刀 銘 行安」(猿投神社蔵)

中条氏は鎌倉幕府評定衆、室町幕府では奉公衆として中央でも大きな権力を持つ一族で、猿投神社に奉納された多くの宝物や中条氏文書からその権勢を伺い知ることができます。こうした中条氏の財力は中央との繋がりのみでなく矢作川の川湊・平江湊や下江湊を利用した市場の支配を背景としていたと考えられます。

戦国時代の豊田

戦国期の市域は後の戦国大名・松平(徳川)氏、織田氏、今川氏、武田氏の諸勢力が交錯する地域でした。こうした勢力が四方に割拠する中、地元で勢力

を蓄えた鈴木氏・那須氏・三宅氏などの国衆がそれぞれ城を構えていました。在京の中条氏は次第に勢力を弱め、永禄4年(1561)に織田信長の攻撃を受けて滅亡、高橋荘三方(西・東・北)は織田領となりました。織田領となった高橋荘は高橋郡と呼ばれるようになり、高橋郡の領域は豊臣秀吉が領地を受け継いだ頃には現在の旧加茂郡はもとより旧碧海郡域にまで拡大していたことがわかっています。



国・重文「紙本著色 織田信長像」(長興寺蔵)

江戸時代の豊田

江戸時代の豊田市域は、まとまった大きな藩はなく、伊保藩(1万石)・衣(拳母)藩(1万石のち2万石)・寺部渡辺家の領地であった尾張藩領ほか、猿投神社・隣松寺といった寺社領、幕府の家臣である旗本領、幕府直轄領に分かれていました。

〈城下町 衣・拳母〉

衣藩 三宅氏

拳母の城下町の歴史は、慶長9年(1604)11月、武蔵国瓶尻(埼玉県熊谷市)から三宅康貞が入封し衣藩一万石が始ったことによります。三宅氏は中世以来の衣城(金谷城)を廃し、現在の元城町付近に新たに陣屋を構えました。ここは矢作川の水運と街道の交錯する交通の要所で陣屋を中心に町割が行われました。はじめは竹生町・神明町・北町・西町・本町・東町・大手町の7町がありました。

幕府領

三宅氏が寛文4年(1664)三河国田原へ領地を移されると衣は幕府領となり三河代官鳥山氏の支配下にはいりました。代官・鳥山精明は三宅氏時代の城郭を撤去し堀を埋めたて田地とし、衣七町の郷倉を建てたといわれています。またその子精元は延宝元年(1673)洪水の多い、矢作川治水のため曲尺手形の堤防を築いたり、町の道幅を整備するなど多くの事蹟を残しています。幕府領時代の町は竹生町・新(のち北・喜多)町・神明町・北(のち中)町・西町・本町・東町・大手(のち南)町の8町に拡大していたことがわかっています。

拳母藩 本多氏から内藤へ

天和元年(1681)陸奥国石川(福島県石川郡石川町)より本多忠利が一万石で入封し再び衣藩ができました。本多氏は「衣」を「拳母」と表記することを定め幕府領時代に埋めたてられた三宅氏時代の堀をさらえ陣屋を建てました。陣屋の面積は1町3反余り(約1.3ha)と考えられています。寛延2年(1749)本多氏は遠江国相良へ転封となりかわって上野国安中から内藤氏が入封しました。拳母藩内藤家は二万石の城持大名であったので、幕府より四千両を拝領して拳母城(桜城)の築城がすすめられます。しかし矢作川の洪水などで築城は進まず結局、樹木台の七州城へ移転となりました。その結果、城下町としての広がりも下町と樹木町と2か所で発展しました。



拳母城(桜城)本丸三重櫓の設計図

〈城下町 寺部〉

寺部村をはじめとする平井・市木・渋川など20か村の領主・渡辺氏は尾張名古屋藩の家老を務める家柄でした。初代守綱はもともと家康の家臣で、数々の戦功をあげ徳川十六将に数えられた武将です。江戸時代となって家康より一万四千石を与えられ「御付家老」として尾張徳川義直に仕えることになったのです。中世期からの寺部城におかれた陣屋を中心に城下町には西町・本町・新町・田町・新屋町といった町屋が広がっていました。寺部は矢作川の川湊・平江湊に近く、また足助を抜け善光寺へ向かう街道が通る拠点の地であり、江戸時代を通じて変らぬ領主・渡辺氏のもとで文化的にも栄えました。



「小牧・長久手合戦図屏風」(部分)

〈城下町 伊保〉

慶長5年(1600)10月丹羽氏次が一万石の大名として伊保の領主となり伊保藩が誕生しました。丹羽氏は上伊保村の御嶽町に陣屋を建て町づくりを始めました。大手門前通りの町並みを整え家中屋敷と町人屋敷をつくり、裏御門通りに3軒の町屋敷を置いたといわれています。丹羽氏は寛永15年(1638)に加増され美濃国恵那郡岩村へ領地替となり伊保は幕府領となりました。

その後、天和元年に陸奥国石川郡浅川より本多忠晴が一万石で入封し、再び伊保藩ができました。本多氏の支配はその後のわずか29年間でしたが陣屋をつくり長さ136間(244.8m) 横幅2間(3.6m)の道を整備したと伝えられています。伊保城下には尾張から信濃へ続く飯田街道が通っており、この街道によって城下が発展したと考えられています。

庚 申 さ ん

金谷町三光寺は「金谷の庚申さん」と呼ばれ、市内外の信仰を集めています。真言宗に属する寺院ですが、本尊の青面金剛童子にちなんで「庚申さん」と親しまれてきました。「庚申信仰」は干支でいう庚申の日の信仰のことです。この信仰による石造物には青面金剛をはじめ、帝釈天や猿田彦の像を表したものがみられます。



三光寺（通称 金谷庚申）

庚申信仰の信者たちが結成している集団のこと、またその信仰行事のことを「庚申講」といいます。室町時代の末期ごろの成立で、庚申の夜に宿に集まって夜を徹して行われます。お神酒・精進料理などを祭壇に供え、「般若心経」を唱えてから雑談をして時をすごします。徹夜することの意味は、人に大害を及ぼすという三尸(さんし)という虫が人間の腹中にいて、庚申の夜に、人が眠ると体内から抜け出して天帝に日頃の罪を告げに行きます。すると天帝はその人を早死にさせてしまうので、長生きを祈願するならば、眠らずに起きているようにという中国の道教の教えによっています。庚申の日には守らなければならないことも多くあります。もしもこの夜に子供を授かると、その子は盗人になるとまでいわれていました。そのほか食べ物も肉類を避けなければならないという禁忌もあります。しかし最近では形式的なものが多くなり、一種の娯楽集団になったりしています。

さて、金谷の庚申さんでは、春の初庚申は特に参

拝者が多く、戦前は樹木町あたりから人波で埋まったといえます。沿道には露店が並び、植木屋が多かったそうで、春の縁日としては近在にないほどにぎわいました。文字の上達を祈願する人や、耳の遠い人にご利益があり、特に耳の遠い人は「きり」を持って参拝しました。庚申さんに持参した「きり」で耳穴をあけてもらうわけで、寺内にはそうした「きり」がたくさん残っています。

また渡刈町にも七基の庚申があります。六臂の青面金剛童子像や「庚申」の文字を刻んだ石碑などです。渡刈事蹟誌によれば十数か所と記載されていますが、今は七基が確認されています。町内では閏年ごとに庚申さんを建ててきたといい伝えられているので、数の多いのもうなずけます。



渡刈町の庚申(青面金剛童子像)

現在はこれらの庚申を町内の老人が世話をし、命日にはお神酒、線香、ろうそく、お水を供えて供養しています。特に一月の命日には町内の人々から寄付をつのり盛大にお祭りをします。参拝者も多く、商売繁盛、身体壮建を祈願しますが、こちらでも耳の遠い人には「庚申さんがきりで耳の穴をあけてくれる」といって厚い信仰があります。（成瀬憲作）

《参考文献》

『豊田市史 五巻(民俗)』1976 豊田市教育委員会
『日本民俗大辞典』2000 吉川弘文館

西山万歳 — 正月の風物三河万歳 —

今年は2001年を迎えた21世紀の始まりの年であり、正月もやや趣の違った思いがありました。

新年の風物として家の門や玄関に立てる門松があります。昭和も40年代に入るまでは、万歳師が家々をまわり、正月のめでたい口上を鼓に合わせて述べて、こっけいな掛け合いを演じていました。豊田地域に伝わっている万歳は三河万歳と呼ばれています。以前は、門松と万歳が正月の気分を盛り上げてくれました。



西山万歳の太夫と才蔵

万歳は、烏帽子をかぶって扇子を持つ太夫と鼓を持つ才蔵の2人がコンビで正月のめでたさをおもしろおかしく鼓に合わせてはやすのが一般の姿ですが、1人で万歳を行って正月の名物になっていた人もいます。

万歳師は尾張の知多郡、愛知郡、安城市等、外からも来ましたが、旧高岡地区の西岡町や旧猿投の東保見町や旧挙母の土橋町でも万歳を演じていた人達がおられました。

今回は「西山万歳」を後世に伝えていくために熱心に取り組んでいる西岡町の保存会の方々が平成12年11月25日に若園小学校創立百周年記念式典に参加された機会に、太夫役をつとめる「西山万歳保存会長」でもある西岡町の近藤松治氏に現在の活動と由緒をお聞きしました。当日、三河万歳の流れを引く西山万歳の披露を行った人は7人で、正月のめでたさを表現する七福神を演じました。

太夫は近藤松治氏、才蔵は太夫を真中にして舞台に向かって右方に深田忠男氏、原田銀彦氏、中野満



七福神の舞

氏、左方に前田数之氏、前田弘氏、前田勝弘氏がそれぞれの役を担って江戸期からの伝統芸能である「西山万歳」を披露されました。その衣装は太夫ははかま、才蔵はたっつけです。保存会は毎月3回土曜日の夕方に2時間、西岡区民会館で例会と練習を続けています。また、地元の堤小学校でも万歳の後継者育成のために担当の先生と共に指導を行っています。西山万歳は三河万歳の一派で、起源は江戸時代初期にさかのぼると言い伝えられています。高岡町誌（昭和43年発行）には、堤村庄屋中野万五郎が堤に伝わっている万歳を正月ごとに江戸に祝いのために送っていたことが西山万歳の伝承したことの始まりとあります。

惜しくも江戸後期の文化年間に絶えましたが、数十年後の文政年間に中野元蔵、近藤伝左衛門が再興し、その後、地元の人に継承され、平成4年から現在の保存会が西岡自治区の伝統芸能として保存につとめています。

（安藤 勇）



西山万歳保存会の万歳衣装

収蔵資料の紹介

提 重 (さげじゅう)

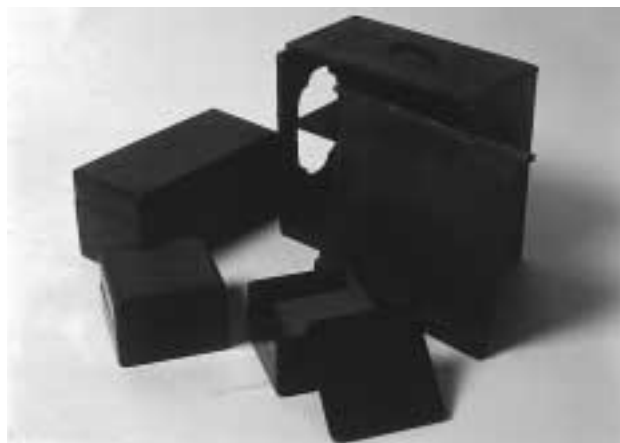
提重は重箱から派生した特殊な弁当箱です。重箱が正月や節供、物見遊山、祝儀・不祝儀、お見舞いなど多様な用途に使われたのに対して、提重は花見遊山や芝居見物などおもに野外での酒宴に便利のように工夫された携帯用の重箱で、江戸時代に発達・普及したものです。組重箱をそのまま手提げ台にのせて提げるようにした簡略的なものから提げ環のついた外箱に酒瓶・杯・銘々皿などを揃えたものまで多様なものが見られます。また、提重は地方によって提げ盆(さげばん)・携盒(けいこう)という名で呼ばれています。

本資料の造りは重箱と同様に木製の塗り物の箱で、内面を朱漆塗り、外面を漆塗りとした無地のものです。器である内箱は桜材で、外箱は檜材を用いています。提げ環のついた外箱は2段に仕切られ、上下に動く蓋が付いています。上段には方形の小型の蓋付重が2つ入れられ、下段には長方形の蓋付重が入っています。それぞれの箱は2段構成となっています。上段の小型の箱は副食であるおかず入れで、卵焼き、かまぼこ、煮しめ(れんこん、にんじん、こんにゃく、しいたけ、えんどう、さといも)などを入れたりしました。

下段の箱はおもに主食をいれる器で、しそ・なめし・ごまなどの握り飯や炊き込みごはんなどを入れたりしました。

このほか、郷土資料館では数点の提重を収蔵しています。これらの資料には箱形の酒入れが付属しているものもあります。

これから迎える春の花の宴席にかつての物見遊山のように、このような提重をもって出かけることができれば風情がいっそう増すのではないのでしょうか。



いわな 岩長遺跡展示室オープン

【百々町8丁目】

平成12年12月に市内百々町8丁目の住宅団地内の集会室2階に岩長遺跡展示室がオープンしました。岩長遺跡は現在住宅団地となっている台地にあり、この一帯は弥生時代から古墳時代の集落跡で、平成9年～11年度に発掘調査が行われました。住宅団地の開発事業者である日本勤労者住宅協会の好意により開設することができました。

遺跡は矢作川を眺める丘陵上に営まれた2世紀から8世紀ころを中心としたムラの跡で、縄文晩期～弥生時代前期の土器棺墓3、弥生時代後期の竪穴住居跡13、古墳時代後期の竪穴住居跡38、掘立柱建物7、古墳13、中世の建物2棟が発掘されました。

展示室は約170戸からなる住宅団地の北西隅の一角にエコセンターと命名された集会室が建設され、その2階に21.9㎡の展示専用のスペースが設けられました。エコセンターは環境に配慮された設計で、太陽光による発電で室内温度の調節、照明、雨水の貯溜と再利用等の機能を有し団地住民のコミュニティの拠点施設となっています。

展示は遺跡の概要、位置、全体図、住居・古墳の配置図、遺物の出土状況、竪穴住居の復元図、航空写真を利用した7世紀後半の集落復元図など写真と図によるパネルと、有舌尖頭器、弥生式土器、土師器、須恵器、玉などの出土品を展示しています。何よりも遺跡の状況と出土品が現地で見られる点は遺跡の立地や環境を理解するうえで、たいへん臨場感に富み、古代の人々の生活がまのあたりに浮かびます。当地に遺跡の存在した事実を未来に伝える施設としてその果たす役割は大きいと思われます。発掘後の遺跡と出土品の活用方法としても評価できます。



岩長遺跡展示室のようす

発掘調査速報

○古城遺跡^{ふるしろ} 御立町2・11丁目]

A 地区と B 地区(計約2,700m²)の調査が終了しました。A・B 両地区では、奈良時代末～平安時代初め頃の竪穴建物7棟と、鎌倉・室町時代の掘立柱建物12棟・竪穴状遺構2基・溝30条・井戸3基・柵列7列・土塙85基・性格不明遺構1基などが確認されました。

確認された遺構の中でも特に注目されるのは、2基の竪穴状遺構、SX3とSB1です。SX3は、平面が約5.9×4.3mの長方形で、深さが約60cmです。SB1は、平面が1辺約3.8mの正方形で、深さが約25cmです。2基とも底面が平坦になっており、元は柱や上屋を伴った半地下式の建物だったと考えられます。

一般に「竪穴住居」として知られている竪穴建物は、西三河地方では9世紀中頃までに次第に少なくなり、10世紀以降には消えてしまいます。しかし古城遺跡の竪穴状遺構の時期はSX3とSB1ともに、出土した遺物から14世紀代(鎌倉時代末～室町時代初頭)と考えられます。古城遺跡の竪穴状遺構SX3とSB1は、いわゆる「竪穴住居」とは異なる意味を持った遺構と言えます。矢作川に近く標高が低い場所という立地条件や、遺跡

の近く(久澄橋付近の矢作川右岸)に江戸時代の川港「拳母土場」があったことなどから、古城遺跡には川港的な要素を持った集落があったと考えられます。そして竪穴状遺構は、その集落の中で倉庫的な役割をしていたと考えられます。調査成果をさらに整理していく上で、この遺構の役割などが明らかになることでしょう。

今後の現地調査は、A 地区・B 地区の南側にあたるD 地区・E 地区(約1,000m²)の遺構確認作業をすすめていく予定です。



竪穴状遺構

○万加田遺跡^{まんかた} 荒井町万加田]

万加田遺跡は、市道建設に伴って、現在2000m²を発掘調査しています。遺跡は矢作川と竜川の合流地点のやや北東に位置しています。昨年まで発掘調査をしていた花本遺跡の南側にあたり、花本遺跡同様、近世の溝、奈良時代の竪穴住居が検出されています。また、東に約200m離れた所に船塚遺跡という縄文時代の遺跡があります。

遺跡は現在田地ですが、約50～80cm下には奈良時代の住居が5軒、掘立柱建物が1棟、南北に走る溝などが検出されました。それらの遺構は当時の微高地に建てられており、調査区の南東区域は標高が低くなっており、砂の堆積や鉄分の表着から湿地帯であったと考えられます。

調査区の北東にある住居は、同じ所に最低三回は立て替えられています。竪穴住居からは、須恵器の坏、坏蓋、碗、盤などが形を残して出土しています。

竪穴住居が建てられる前には、南北に川が3本走っていたのが確認されています。そこからは須恵器が出

土しており、氾濫で川が埋没した後に竪穴住居が建てられたことがわかります。

その他に調査区の北西から縄文時代の土壌が2基確認されました。土壌の上には石が円形に並べられていました。中からは深鉢の破片が出土しています。縄文時代の遺構は竪穴住居のある面よりも下からでる可能性もあり、今後の調査で遺構や遺物が出てくるか楽しみです。



初代渡辺半蔵守綱もりつな つなもとから12代綱倫までの歴代領主の画像です。初代守綱と2代重綱の像は2幅ずつあるので全部で14幅遺されていますが、このうち初代守綱像は年代の古いものが県の指定文化財となっています（資料館だより21号参照）。

ここに紹介するのは武将姿の初代守綱の画像です。着用している具足は、びやくだんぬりなんばんどうぐそく白檀塗南蛮胴具足といい、胸部がふくらんでいることから鳩胸鎧ともいわれます。寺部初代領主であった守綱が慶長5年（1600）大阪城にて徳川家康から拝領したものであり、豊臣秀吉が輸入した西洋の甲冑であるとされます。



初代 守綱もりつな

戦国時代、武将の画像はその領国の菩提寺に残されるのが通例でした。この渡辺家歴代画像もそれと同様、菩提寺である守綱寺に残されていました。故人の姿を永く遺し、たたえる意味もあったことでしょう。

文化財シリーズ

35

わたなべけれきだいがぞう
渡辺家歴代画像
（市指定文化財）
守綱寺

今回の特別展「豊田市の城下町展」では、城下町寺部の紹介とともに、白檀塗南蛮胴具足（渡辺明綱氏蔵）も展示公開されます。



白檀塗南蛮胴具足
（渡辺明綱氏蔵）

資料館NEWS

○文化財を火災から守りましょう

平成12年12月11日早朝、拳母神社に隣接する瑞光院本堂床下より出火し、本堂が全焼しました。行基作と伝えられる本尊仏の阿弥陀如来座像が焼失し、また、境内の市指定天然記念物のクスノ木が半焼の難を受けました。

郷土資料館では、文化財を火災から未然に防ぐため、消防署の協力により郷土資料館と力石町の如意寺の2ヶ所で防火訓練を行いました。

平成13年1月23日（火）の資料館の防火訓練には約50名が参加し、避難訓練や初期消火訓練を行いました。中消防署などからはしご車、消防車など9台が出動し本番さながらの消火訓練を行い、防火意識の大切さを学びました。

1月24日（水）には力石町の如意寺で訓練を行いました。

た。消火器による初期消火訓練では、油パッドの火に近すぎたり、遠すぎたりと悪戦苦闘しながらも、消防職員に的確な取り扱いを教えてもらいました。またポンプ車による一斉放水訓練や、けが人の救助訓練を実施しました。



力石町如意寺で行われた防災訓練

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）年末年始

入場料 無料（ただし特別展開催中は有料となります）

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.35■

平成13年3月10日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎（0565）32-6561 FAX（0565）34-0095

E-mail：rekihaku@city.toyota.aichi.jp